

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

主 論 文 の 要 旨

論文題目 日本語次元形容詞の意味研究
—認知言語学の観点から—

氏 名 栗木 久美

論 文 内 容 の 要 旨

本研究の目的は、次元形容詞の意味を認知言語学の観点から分析し、その意味拡張の認知的基盤と多義構造を明らかにすることである。本研究の考察対象とする語は、場所に関する何らかの1次元の量を表す「深い」「高い」「遠い」「広い」と1次元の量を表す代表的な形容詞である「長い」の5語とした。従来の次元形容詞の意味研究では、形容詞の各意味の意味特徴を詳細に記述することに主眼が置かれていたが、本研究は、「意味に経験などからの動機づけを求める」(松本 2003 : 3) という認知言語学における意味観の下、形容詞の精緻な意味の記述だけでなく、複数の意味間の相互関係に焦点を当てて論じた。さらに、多義語分析の結果を踏まえ、非空間的用法を中心に次元形容詞を類義語として分析し、その類似点と相違点について認知的な基盤の観点から考察した。

先の5つの形容詞の複数の意味間の相互関係及び多義構造を明らかにするという目的に向けて、第2章では、多義語分析の課題を確認し、多義語の複数の意味を関連づける重要な役割を持つ「比喩(メタファー、メトニミー、シネクドキー)」「フレーム」「イメージスキーマ」などの認知言語学の基本的な概念や、複数の意味を統括するネットワーク・モデルについて概観した。

第3章では、形容詞についての先行研究を整理・検討した。形容詞の分類に関しては、単語の意味により「属性形容詞」と「感情形容詞」に分類するものと、形容詞における話し手の主体的な関わりである「時間的限定性」と「評価のタイプ」を軸に「特性形容詞」と「状態形容詞」に分類するものがあるが、どちらの分類方法でもその中間に位置づけられるものがあり、分類は連続的であることを見た。さらに、ある形容詞を使用する際の4つの判断基準を概観したが、それらの基準は固定的なものではなく、判断の基準は話し手である主体の対象に対する把握の仕方に基づいていると考えられることを述べた。

第4章から第8章は、「深い」「高い」「遠い」「広い」「長い」の意味の個別的分析を行った。本研究では、これらの形容詞を多義語として捉え、多くの用例から意味特徴をボトムアップ的に抽出、記述した。そして、プロトタイプの意味を起点とし、その他の意味がメタファー、メトニミー、シ

ネクドキーの3種の比喩のいずれを基盤として相互に関係づけられているかを明らかにした。また、比喩による拡張の基盤として、イメージスキーマやフレーム、概念メタファーを示し、メタファーに基づく拡張からスキーマを抽出した。最後にこれら個々の意味の関係を多義構造として位置付けた。各形容詞の多義語分析については、次のようにまとめられる。

第4章では、「深い」の意味分析を行った。その結果、「深い」の意味を、空間的用法では<方向性>、<角度>、<濃度・密度>の観点から意味①～意味⑤の5つ認定した。非空間的用法では、<心>、<思考>、<事情>、<関係>、<眠り>、<時間>、<味・香り>、<色>、<音>、<非道義性>、<状態・特性>の観点から意味⑥～⑰の12認定した。プロトタイプの意味については、Lakoff & Johnson (1980)等諸研究を踏まえ、「長い」を除いた4つの形容詞のプロトタイプの意味が空間的用法にあるという前提で検討した。「深い」では、空間的用法である意味①～意味⑤を「意味①<下方への距離>と意味②<奥行き距離>における制約」、「名詞化された「深く」における制約」、「名詞「深み」における制約」について考察し、意味①をプロトタイプの意味と認定した。さらに、空間(意味①)から非空間への意味拡張について、「容器」のイメージスキーマを基盤としたもの(意味⑥⑦⑨～⑬⑮～⑰)と、「深い場所」のフレームを基盤としたもの(意味⑧⑭)があることを明らかにした。

第5章では、「高い」の意味分析を行った。その結果、「高い」の意味を、空間的用法で意味①と意味②の2つ、非空間的用法で<金銭>、<数値・数量>、<水準>、<性質・様相>、<関心>、<序列>、<香り・味>、<音>の観点から意味③～意味⑪の9つ認定した。さらに、意味⑥に3つの下位分類を認定した。プロトタイプの意味について、空間的用法である意味①と意味②を「高い」が名詞化された「Nの高み」「Nの高さ」と名詞的に用いられる「Nの高く」のそれぞれの場合の使用頻度の観点から考察し、意味①をプロトタイプの意味と認定した。また、非空間的用法において「音そのもの(の高さ)」(意味⑩)と「音の大きさ」(意味⑪)を構成要素に持つ「音」のフレームを基盤とした意味拡張があることを述べた。次に、「高い」を概念メタファーの観点から考察した。その結果、「高い」の空間的用法から非空間的用法への拡張には、上下のメタファーのうち概念メタファーMORE IS UPを基盤としたものと概念メタファーHIGH STATUS IS UPを基盤としたものがあることを説明した。また、概念メタファー「音域が高いことは上」を提案した。

第6章では、「遠い」の意味分析を行った。その結果、「遠い」の意味として、空間的用法で意味①を、非空間的用法で<時間>、<関係>、<理想・目標>の観点から意味②～意味⑤の5つを認定した。さらに意味③に下位分類の意味を1つ認定した。プロトタイプの意味については、「遠い」の空間的用法における意味は意味①だけであるため、プロトタイプの意味の認定のため、「遠い」の意味①～意味⑤に関して名詞化された「Nの遠く」における制約について考察し、意味①がプロトタイプの意味とすることができることを確認した。また、非空間的用法において、「ある時点の状態と理想・目標の状態との隔たり」(意味④)と「ある時点の状態と理想・目標の状態との隔たりの過程」(意味⑤)を構成要素に持つ「理想・目標」のフレームを基盤とした意味拡張があることを述べた。

第7章では、「広い」の意味分析を行った。その結果、「広い」の意味を、空間的用法で意味①～

意味③の3つ、非空間的用法で〈非空間的な範囲〉、〈心〉の観点から意味④と意味⑤の2つ認定した。プロトタイプの意味については、「広い」の空間的用法である意味①～意味③に関して、「Nの広さ」の使用頻度と「Nは広い」の用法上の制約について考察し、意味①をプロトタイプの意味と認定した。意味①の「広い」については、用途など何らかの基準に照らして、対象がその範囲内に何らかの物が十分存在しうるほどの大きさであり、さらに2次元的な伸びの大きさに焦点が当たっている場合、対象の相対的な大きさを表すことを実例に基づいて説明した。また、空間的用法において、「広い」が「広い場所」のフレームを基盤として意味①〈面積〉、意味②〈空間〉、意味③〈距離〉を表すことを述べた。

第8章では、「長い」の意味分析を行った。その結果、「長い」の意味として、空間的用法で意味①を、非空間的用法で〈時間〉、〈言語活動〉の観点から意味②と意味③の2つを認定した。プロトタイプの意味については、意味①～意味③に関して、「長いN」の使用頻度について考察した。そして、意味①はより多くの語と共起し、意味②は共起する語は意味①より少ないが使用機会は多いという結果から、意味①〈距離〉と意味②〈時間〉は同程度に自立性を有していると考えられ、従って意味①と意味②を「長い」のプロトタイプの意味と認定した。また、意味③については、「文や文章の始まりから終わりまでの（文字列の）距離」（意味①）と「文や文章のまとまり」（意味③）を構成要素とする「文書」のフレームと「言語活動にかかる時間」（意味②）と「言語活動の量」（意味③）を構成要素とする「言語活動」のフレームを基盤とした意味拡張が想定されることを述べた。

第9章では、「深い」「高い」「遠い」「広い」「長い」を類義語とみなし、第4章から第8章で得られた結果を踏まえ、これらの形容詞の類義語分析を行い、類似点と相違点について次のように記述した。

まず、5つの形容詞の1次元の量に関する意味のうち「深い」「高い」「遠い」「長い」はプロトタイプの意味である意味①を、「広い」は1次元を表す意味③を対象として、それぞれが空間の量を表す際の要素の観点から類似点と相違点を述べた。空間の量を表す際の要素としては「量」「基点」「終点」「方向」「面」が考えられ、各形容詞の意味は「基点」と「終点」の間の「量」を表すという点で類似しているが、この3つの要素は「長い」の要素であることから、「長い」と「深い」「高い」「遠い」「広い」は類似していると言うことができる。また、「深い」「高い」「遠い」は、「方向」の要素が含まれているが、具体的な方向はそれぞれ「下」「上」「目標」と異なっている。「広い」は「面」の要素を含んでいる点が他の4つの形容詞と異なる。

次に、「深い」「高い」が、「関心」「関係」「レベル」と共起する場合、「深い」は「容器」のイメージスキーマを基にした「容器」のフレームを基盤として、抽象的な容器の底にある対象の本質に焦点が当たっていると考えられ、「高い」は上下のメタファーにより基点から抽象物が積み重なり距離を表すと捉えられ、積み重なり（対象の量）に焦点が当たっていると考えられる。また、「高い」は物事が積み重なった上端、「深い」は容器の底という、それぞれの基準から向かう向きの先端部分に注目することにより、各意味の「上向き」「下向き」という意味は背景化され、基準からの隔たりが大きいという点で、「高い」と「深い」が類似していると考えられることを述べた。

続いて、「長い」「深い」「遠い」の各語の空間的な意味と時間的な意味についてフレームの観点か

ら分析した。この3語は、空間領域における意味の構成要素が時間領域に写像され、時間領域において「2つの時点」「2つの時点間の時間量」の要素を含んでいる点で類似していると言える。一方、「深い」「遠い」は、「基準となる時点から別の時点までのベクトル（過去／未来）」も要素としているが、さらに「深い」は、「時間経過の過程」を要素としており、これらの要素の相違が各形容詞の相違に反映されていると考えられる。また、3つの形容詞が焦点化する要素と、時間に関する要素を持つ名詞のフレームの要素との関係に矛盾がないとき、これらの形容詞と時間的要素を持つ名詞が共起できると考えられることを述べた。

最後に、第10章では、本研究の結論をまとめ、今後の課題を述べた。

以上のように、本研究では、従来の研究では説明が不十分であった「深い」「高い」「遠い」「広い」「長い」の各形容詞の複数の意味の相互関係について明らかにし、個々の意味や拡張の基盤を多義構造として表した。さらに、類義語分析により、複数の次元形容詞が非空間で類似の意味を表すとき、その相違はイメージスキーマや概念メタファー、フレームにより説明できるものがあることを示した。これらの意味分析を通して、次元形容詞の性質（の一部）を明らかにし、私たちが空間に関する概念を基に非空間に関する概念をどのように把握しているのかについて、その一端を示した。